

# 八王子市郷土資料館 だより

vol. **92**  
2013. 1

HACHIOUJI CITY HISTORICAL MUSEUM NEWS



古い写真を読む ②④ 紀元 2600 年記念式典集合写真（昭和 15 年） 漆間浩氏蔵

昭和 15 年（1940）には、神武天皇の即位から 2600 年を記念して、国内で様々な記念行事が行われた。八王子市内では、紀元 2600 年奉祝式（11 月 10 日）と奉祝行列、聖蹟巡拝強歩大会（11 月 23 日）、明治天皇聖蹟展覧会（11 月 23 日～ 25 日）などが行われている。

市立第二尋常小学校（現在の市立第二小学校）では、11 月 10 日に紀元 2600 年記念式典を挙行了。写真は、6 年生菊組の記念撮影である。

紀元 2600 年を記念した賑やかな祝賀行事は、日中戦争が長期化する中で、国内に漂う重苦しい空気をはらう為に行われた。行事の終了後、政府と大政翼賛会は「祝ひ終わった さあ働こう！」をスローガンに、国民にこれまで以上の戦時体制への協力を求めた。翌年には、「国民学校令」が施行。尋常小学校は国民学校となり、子どもたちは、「少国民」と呼ばれるようになる。 (こ)

## 目次

- 表紙 古い写真を読む ②④  
紀元 2600 年記念式典集合写真（昭和 15 年）
- P. 2 元千人頭志村貞廉一家の静岡移住
- P. 4 第一回内国勧業博覧会と八王子
- P. 6 近世地誌にみる八王子の鋳物師  
～『御府内備考続編』から～
- P. 8 八王子の一里塚

# 元千人頭志村貞廉一家の静岡移住

加藤 典子

東京大学史料編纂所が所蔵する『幕臣志村貞廉日記』は慶応4年(1868、明治元年)6月から明治14年(1881)まで執筆された千人隊の頭志村源一郎貞廉(以下、貞廉)の日記です。当館では平成23・24年度にかけて『元八王子千人頭志村貞廉日記』第1巻・第2巻として刊行しました(以下、『志村日記』)。また、刊行を記念して平成25年2月5日からは「書状からみる一新時代の幕開けと千人隊」と題したコーナー展を開催します。志村源一郎貞廉関連の史料から千人隊(慶応2年に「千人同心」から改称)に於ける「明治維新」を考察する展示です。静岡という新天地に旅立った貞廉の記録を通して、新時代の幕開けに立会った人々の歴史を紐解きます。そこで、本稿では志村一家に関する史料の中から、静岡移住直後に滞在場所の陣屋から家族に宛てた書簡を紹介し、一家の静岡での生活を振り返ってみたいと思います。

千人同心は江戸時代を通して日光東照宮の火の番として活動しました。千人同心を統括する千人頭は旗本格で八王子に拝領屋敷を賜り居住しました。幕末期には千人隊と改称され、横浜警衛や第二次長州征討などに派遣されています。しかし、幕府が倒れたことで陸軍奉行配下であった千人隊は、他の幕臣たちと同様、将来の去就選択を迫られることになりました。①駿府府中藩七十万石の藩主となった徳川家について静岡へ移住する「徳川随従」②明治新政府に仕え朝臣化する「王室従事」③武士身分を離れ土着して農商業に従事する「帰農」の三つの選択肢で、頭だけでなく隊士全員に提示されています。この時、貞廉ら頭はいち早く徳川家への随従を決定しました。一方で、総人数894人の隊士のうち、徳川家への奉公を希望したのは3人のみでした。旗本格である頭にとって武士身分を失うのは耐え難いことだったのでしょうか。

志村家の組頭をつとめた村松家に5月8日付の届書が残されています。大総督府長州軍謀方大村益次郎と河野仲次郎通津らの頭が面会した記録(1)であり、頭は徳川家への奉公と、新政府への恭順姿勢を明確に示しました。非常に早い段階で随従の意志を固めていたことがわかります。一方で貞廉が組頭村松丈之進に宛てた書簡(2)には妻子を残して八王子を離れることへの葛藤が克明に記されています。即座に随従を決定した志村一家ではありましたが、その将来は不安要素で溢れており、それは苦難の道のはじまりでした。

「支度出来次第駿行勝手次第可致」と徳川随従の許可が出たのは9月18日です。これを受けて貞廉は長

男太郎・次男<sup>つとむ</sup>力を連れて、頭の石坂鈴之助とともに22日の朝に東京四谷を出立、沼津へ向かいました。移住の1ヶ月前に陸軍会計所に提出した書類に「其余家族之儀は一時八王子表へ残置、追て引取申度、尤出立跡之儀は元千人隊組頭村松丈之進へ頼置申候」(3)とあるように、妻子を残して八王子をあとにしました。

沼津城内の陸軍会計所へ到着した一行は「千人局之分不残小島之由」との指示を受けます。庵原郡<sup>いばら</sup>小島村(現、静岡市清水区小島町)の小島陣屋は元々は滝脇丹後守の陣屋で、静岡移住家臣たちの一時的な居留地として使用されました。この時期、静岡各地に移住家臣の一時滞在所が用意されたのです。貞廉らは10月1日に小島に到着、陣屋内拾五番長屋に入居しました。10日の日記には「河野・志村・村松三人宛にて手紙遣、無滞小島に居り候へ共家族<sup>ひきまとも</sup>引纏は来春之事可致申遣候」とあり、八王子に書簡を送ったことがわかります。無事到着したことを伝え、家族を静岡に呼ぶのは来春以降になるとしています。日記の記述によると明治2年(1869)2月10日に一家は合流しました。

志村一家関連の文書の多くは志村組組頭の村松家に残されていますが、河野家にも数点確認できます。その中に10月9日付で小島陣屋から送られたものがあります(4)。この書簡に年代は記されていませんが、日記の10日条に記された手紙とみて間違いありません。手紙は上野戦争に参加したことを疑われ吟味中であった実弟仲次郎の嫡男章一郎と貞廉三男<sup>ひろし</sup>胖、組頭村松丈之進に宛てられており、上記の記述と符合します。

10月9日付書簡では「小島は鼻の先見あげるほどの山ぐるりと取巻き、山又山と幾重も幾重も重り居りて、谷川山のすそを流れ、里は晴ても此所は霧ふり来り四方の晴れ候かと存候へは雨来り、日光よりは一段山が近いと申事」と小島の様子を述べています。小島は周辺を山に囲まれた地域で、貞廉は山深い土地柄を「実に隠れ家同様之深山中」と表現し仙人になったような心持ちであるとしています。静岡を暖かな所と伝えていますが、小島は山の中であって冷氣・湿気ともに強く、貞廉をはじめ子どもたちも湿疹が体中に出来てしまったようです。「湯を立てるにも水風呂無之垢たらけて居り申候」という不自由な状況で衛生面に問題をきたしたのかもしれない。



小島陣屋跡と周辺に迫る山々

小島での生活は食事面でも苦労の連続でした。小島から一里ほどの薩捶峠の下には興津の海が広がっており興津鯛は田子浦近辺の宿場の名物でした。しかし書簡には「魚は小島いっぴき一疋も来らず随分不自由なる事に候」とあります。魚は小島の集落には届かず東海道の大きな宿場町へと運ばれてしまっていたのでしょう。「此節拙夫・石坂の暮しは日々飯をたいてたべて居候迄之事、味噌もなく小田原にてかひ候梅干ばかり、其外は村之谷川てとり候蟹を塩いりにしてたべ居候仕合候」と質素な食生活が垣間見えます。八王子に残した家族との合流を模索しながらも、現状では元隊士らの扶助も期待出来る八王子の方が生活しやすいと考えていたようです。「八王子の方はるか都にぞんし候」の言葉に生活面での苦労が滲み出ています。

貞廉は小島陣屋周辺の様子を「実□八王子は田舎に(不便利)而ふ弁利と存候処、一万石の陣屋小島へ来て見れば、丸て興福寺谷の通り只々案下の山奥小仏の谷そこ位ひの高ひ山の底」と八王子の地名を織り交ぜて伝えています。また、陣屋には庭がない代りに山中に紅葉・桜などが植付られており、10月は紅葉の盛りで「春の花より美しく、山又山と黄と紅にて染なし、松はみどり中々きれいに候」という景色が広がっていました。山にはミカンの木もあり、諸商品が高値である中ミカンは江戸より安く購入できたとの記述もあります。

食品だけでなく反物類も非常に高値でありました。「中々八王子くらいに諸品之ある処は無之」として、小島に来る際は必要な品を持参するように伝えていきます。またこの時期にはマンテルズボンやジャケットなどの洋服の着用がはじまったことも記されています。マンテルズボンとはフランス式軍装が起源の洋装です。軍隊服に言及していることから、本書簡は収監中の仲次郎が赦免後に静岡へ移住するのを前提として記されたことがわかります。書簡の最後にはなるべく持てるだけの品を持参した方が良く記していますが、一方で荷物の運搬時に雑費がかかるので厳選して持参するよう忠告しており、「向見ずに参り候のゆへ大に

損」をした貞廉の移住経験が生かされています。

『志村日記』からは元千人隊の面々の役職が決定したのが10月20日であるとわかります。11月26日付で村松丈之進に送られた書簡(5)には「小子も先月末御書院組へ入申候」とあり30歳以上の者が駿府城御門の警備などにあたる書院組に編入されました。また、太郎が沼津兵学校生徒となったことが記されています。配属地が静岡と沼津に分かれたことで一家の同居はより困難な状況となってしまいました。本書簡には当惑する貞廉の様子がよく表われています。八王子の妻子にも気を抜かず儉約生活を心がけるようにとの言葉を強い語調で伝えています。

貞廉は書簡の後半で宛行が「二人扶持二十八両」となり、今後の生活が非常に困窮するであろうことを嘆いています。それと同時に「何でも学問さへあれば外に芸は入り申さず候、学問習人は三十俵の同心より四・五百両の御給金取りにいくらも成り申候」と学問の必要性を述べています。この後、兵学校に入学し資業生に合格した太郎は洋式数学や英語などの語学を学び、明治5年(1872)には上京して中央出仕のため奉職活動に邁進することとなります。貞廉は困窮する生活の中で、立身出世のための学問の必要性を移住当初から痛感していたのでしょう。

#### 【註】

- (1) 村松家文書(門倉家所蔵)「慶応四年五月八日付大村益次郎他面会に付届」
- (2) 村松家文書「慶応四年七月十二日付志村源一郎より組頭村松丈之進宛書状」
- (3) 『志村日記一』慶応四年八月二十四日条、十四頁
- (4) 河野家文書「明治元年十月九日付志村源一郎より河野章一郎他宛書状」
- (5) 村松家文書「明治元年十一月二十六日付志村源一郎より組頭村松丈之進宛書状」



貞廉(左)、妻お金(中央)、仲次郎・章一郎親子(右)  
その他の人物は未確定 (志村廣雄氏蔵)

# 第一回内国勸業博覧会と八王子

美甘 由紀子

明治10年(1877)8月21日、上野公園で第一回内国勸業博覧会の開会式が盛大に行われました。当時の明治政府は、輸入の超過や在来産業の衰退、財政危機などの問題に直面していました。明治6年に内務省が設置され、内務卿に就任した大久保利通は殖産興業政策を推進するため、博覧会の開催に力を注ぎました。内務省が目指した博覧会は、珍品や骨董品などを集めた展覧会ではありませんでした。全国から募った多様な出品物を一堂に展示し、出品者や入場者が出品物を比較することで相互に競争心を持たせ、ひいては国内産業の増進につなげる目的がありました。

第一回内国勸業博覧会には、北海道開拓使から琉球藩までほぼ全国(西南戦争の影響により出品されなかった鹿児島県を除く)から1万4455種類、8万4352点が出品されました。出品物は、第一区「鉱業・冶金」、第二区「製造物」、第三区「美術」、第四区「機械」、第五区「農業」、第六区「園芸」の六区に分類し、東本館、西本館、機械館などの六館に府県別に展示されました。

『明治十年内国勸業博覧会出品目録』によると、八王子からも40人近くが出品しています。出品数が最も多いのは、第二区の製造物に分類される織物です。博多男帯地、博多女帯地、色八丈、黄八丈、縞八丈、八反織などで、当時多様な織物が織られていたことがわかります。八王子町の他、散田村、下恩方村、下川口村、宮下村などの機屋も出品しています。第二区の出品物では生糸が続き、他に玉繭から紡ぎ出した玉糸(出品人:宇津木村 坂本傳次郎)、熨斗玉糸(出品人:宇津木村 田中勝五郎)、縫糸(出品人:横山宿 谷合彌七)鉄釜・銅鍋(出品人:八幡宿 師岡忠助)、荷馬鞍(出品人:八幡宿 齋藤善八)、秤(出品人:横町(1) 杉本國三郎)、棒(棹秤などに用いる棒、出品人:横山宿 柏谷勝右衛門)が出品されています。

また、第四区の機械では、織物会所(2)と横山宿の新藤平四郎が織物器械の図面を、谷合弥七が糸引器械の図面を出品しています。

第五区の農業では、杉板(出品人:柚木村 野村 勘兵衛)、槐(手斧の柄に用いる、出品人:小津



楊州橋本直義 内国勸業博覧会開場御式之図 神奈川県立歴史博物館蔵

(第一回内国勸業博覧会の開会式において、内務卿大久保利通が明治天皇・皇后の前で祝辞を読み上げている場面。)

村 井橋繁八)、柏皮(出品人:上恩方村 塚本弥源太)、大豆(出品人:横川村 加藤金五郎)、製茶(出品人:小比企村 中□新六)、白□蚕(出品人:横山宿 谷合弥七)、青藤(出品人:高尾山 鈴木龍溪)、白繭(出品人:横町 田之倉常蔵)、蘭(長沼村 中村源十)の出品がありました。このように特産品として知られていた織物や生糸だけではなく、様々な産物が第一回内国勸業博覧会へ出品されたのです。

上恩方町の尾崎家で所蔵されている文書に、塚本弥源太が出品した柏皮に関する文書が残っています。塚本家は、川井野にあり、江戸時代に上恩方村の上組(3)の名主を勤めた旧家です。文書は、東京の博覧会物品取扱所宛の「博覧会用物品送り状」と柏皮についての説明を綴ったものです。説明書によると、柏皮の産地は、上恩方村字川井野の山の瘦地で、実生から15年経った木を3月から5月ごろに伐る。木には、特に肥料を与えたりはせず、雑木山に生えている木を伐り取る。1尺1寸(約33cm)ずつに切った後に皮を剥ぎ、乾かして縄で束ね6束を1駄とする。1年間の生産高の総計は240駄で代金は約300円になるとあります。「所用并効能」の欄には、「海漁の網に用ゆ」とあります。柏の木の皮には、タンニンが多く含まれていて、魚網の染料に使われました。江戸時代の後期に書かれた『武蔵名勝図会』には、小津村の特産品として手斧の柄を、恩方村の特産品として柏皮を挙げています。明治時代も変わらず村の重要な特産物であったのです。

国家規模の博覧会に柏皮や青藤などの天産物が出品されたのは、意外に思われます。「明治十年内国勸業博覧会出品者心得」では、出品物について、人々が必要とし追々繁盛する見込みのある物や、国内で売り広めようと思う物、外国への販売を目的とする物などを第一としています。しかし、「片田舎の村々<sup>など</sup>の産物」にも世間で相互に知らないものもあり、在り来り<sup>あきた</sup>とっていた物でもなるべく出品するようにとあり、幅広い範囲で出品物を募っていたことがわかります。第一回目ということもあって、当時、内国勸業博覧会の存在は、一般に周知されていませんでした。何をする場で

あるか分からない人が多く、出品物を集めるのもかなりの苦労があったようです。第一回内国勸業博覧会の出品物は、自発的に出品したものというよりは、府県の勸業課員や出品取扱人が、出品するよう勧誘に奔走し、収集してきたと考えられています。上恩方村の柏皮もこのような経緯で出品されたのでしょう。

さて、出品者には審査の上、「龍紋賞牌」「鳳紋賞牌」「花紋賞牌」と褒状が授与されました。八王子では、第五区の農業の受賞者はいませんが、生糸を出品した田代平兵衛(長沼村)、畔見保太郎(横町)、八王子生糸改会社に鳳紋賞牌が、峯尾直一郎(散田村)、野崎富太(散田村)、折田佐兵衛(横山宿)に褒状が授与されました。褒状の三人は、糸織、斜(七)子織、博多男帯地をそれぞれ出品しています。博覧会の報告書には、「八王子の生糸及び織物の類皆頗る精良なり」とあります。特産品である生糸と織物が高い評価を受けたのです。

第一回内国勸業博覧会の入場者は、11月30日まで102日間の会期中、45万4168人を数えました。『石川日記』(4)には、10月29日と30日の2日間、「東京の博覧会」を見物に行ったという記載があります。八王子からも出品者とその関係者はもちろんのこと、多くの人が足を運んだことでしょう。一堂に集められた全国各地の様々な出品物は人々に大きな刺激を与え、織物業をはじめ、八王子の産業が発展してゆく契機となったのです。

#### 【註】

- (1) 現在の大横町。
- (2) 明治7年に絹木綿仕入人仲間(縞買商人)により設立された組織。規約では、八王子の市場で販売する織物は、会所を通すよう定められた。
- (3) 江戸時代、上恩方村は村域が広大であったため、村を上・下に二分してそれぞれに名主役等を配していた。
- (4) 東浅川町の石川家で享保5年(1720)から代々の当主により書き継がれている日記。

【参考文献】 岡國行著『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策—』 2005年 岩田書院発行

# 近世地誌にみる八王子の鋳物師～『御府内備考続編』から～

紺野 英二

江戸時代後期の地誌といえば『新編武蔵国風土記稿』が有名です（以下『風土記稿』とよびます）。

この『風土記稿』は、現在の東京・埼玉・神奈川県の一部にまでおよぶ広大な武蔵国内のさまざまなことがらを網羅していることも知られているでしょう。実はこの『風土記稿』のほかには、御府内（江戸周辺）には、御府内版『風土記稿』ともいべきものがありました。その書籍（典籍）は、『御府内風土記』という名称でした。

ここで、なぜ“ありました”という過去形にしたかということ、明治5年（1872）に火事のため焼失したとされているからです。そして、この失われた『御府内風土記』には、ほかに『御府内備考』と『御府内備考続編』がありました。とくにこの『御府内備考続編』は、『御府内風土記』の編集の際に寺社を調査し作成・提出された書上<sup>かきあげ</sup>を編集したものです。

この『御府内備考続編』は、昭和62年までに、謄写本として刊行され、わたしたちは、『御府内寺社備考』という書籍名で見ることができます。

今回は、この『御府内備考続編』に収録された梵鐘（半鐘）の銘文から八王子の鋳物師名を探してみたいと思います。

齋藤経生さんをはじめとしたこれまでの加藤鋳物師の研究成果から加藤氏製作の梵鐘（半鐘）がどこに所在しているかが判っています（『八王子の歴史と文化』第一号、平成5年）。これによれば、東京23区内では、種徳寺（港区）と勝光院（世田谷区）というお寺に現存しているそうです。種徳寺の梵鐘は、「加藤市郎右衛

門尉吉次」という人物が宝永5年（1708）に、勝光院のそれは、元禄11年（1698）に「加藤太郎兵衛吉高」という人物が製作しています。

さて、『御府内備考続編』からは、これまで知られていた例以外に加藤鋳物師の作例についての記述をみることができます。前文で紹介した種徳寺の例は、八尺四方（約2.4m）の鐘楼に掛かっていたとあります。

この種徳寺の作例以外に、『御府内備考続編』のなかから加藤鋳物師の梵鐘を3例みつけることができました。そのうちの1例は半鐘で（『御府内備考続編』には、「喚鐘」と記録されています）、下高輪の法蔵寺（浄土宗）の項目に、寛保3年（1743）に加藤重兵衛藤原吉政という人物の作例がみえます（写真①）。

また、広尾の天現寺（臨済宗）の項にも、享保5年（1720）製作の梵鐘銘が記されていました（作者は横川住・加藤氏式部藤原吉高とあります）。高さ四尺（約120cm）、直径二尺七寸（約81cm）、厚さ三寸六分（約7.5cm）といった大きさまで記されています（龍頭一尺一寸とも書いてあります）。

さらに、赤坂の松泉寺（臨済宗）の項に、天明4年（1784）作の梵鐘の記述がありました（作者は連名で、横川住・加藤勘兵衛尉藤原憑鋭、八王子住・長谷村善助宗般）。ここには、加藤鋳物師だけでなく、八王子の長谷村氏という名もみえます（写真③）。

今回は、近世地誌類のなかでも『御府内備考続編』から八王子の鋳物師の作例を探してみました。すると、これまで知られていない加藤鋳物師の作例が見つかっただけでなく、冶工・長

享保五年（1720）：天現寺（臨済宗）加藤氏式部藤原吉高  
寛保三年（1743）：法蔵寺（浄土宗）加藤重兵衛藤原吉政（半鐘）  
天明4年（1784）：松泉寺（臨済宗）横川住 加藤勘兵衛尉藤原憑鋭  
八王子住 長谷村善助宗般

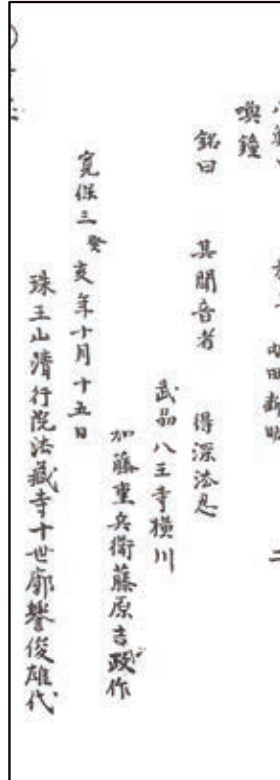
表①『御府内備考続編』にみる八王子の鋳物師名

谷村氏という名もみつけることができました  
(実在する長谷村氏の作例は、国分寺市観音寺  
にあります)。

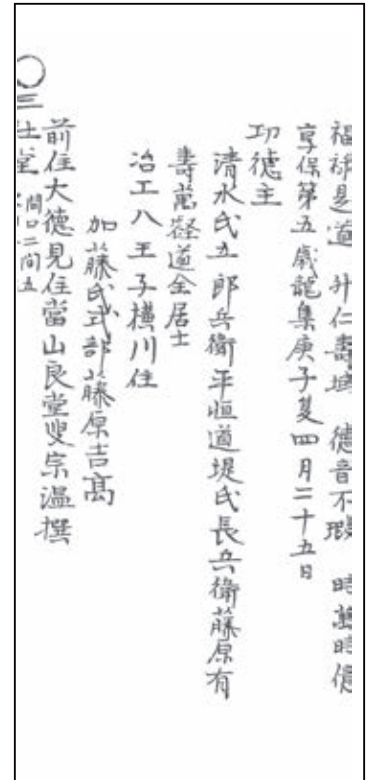
これまで、八王子の鋳物師は、加藤鋳物師が  
有名でした。最近の調査では、江戸時代後期の  
八王子には、師岡氏という鋳物師がいたことが  
わかってきています。さらに今回、『御府内備  
考続編』から長谷村氏という鋳物師の存在を見  
つけることができました。

江戸時代に製作された梵鐘（半鐘）のほとん  
どは、太平洋戦争中の金属供出の対象とされま  
した。今回紹介した梵鐘（半鐘）は、はたして  
現存しているのでしょうか。また、江戸時代の  
八王子には、こうした鋳物師がどれほど活動し  
ていたのでしょうか。

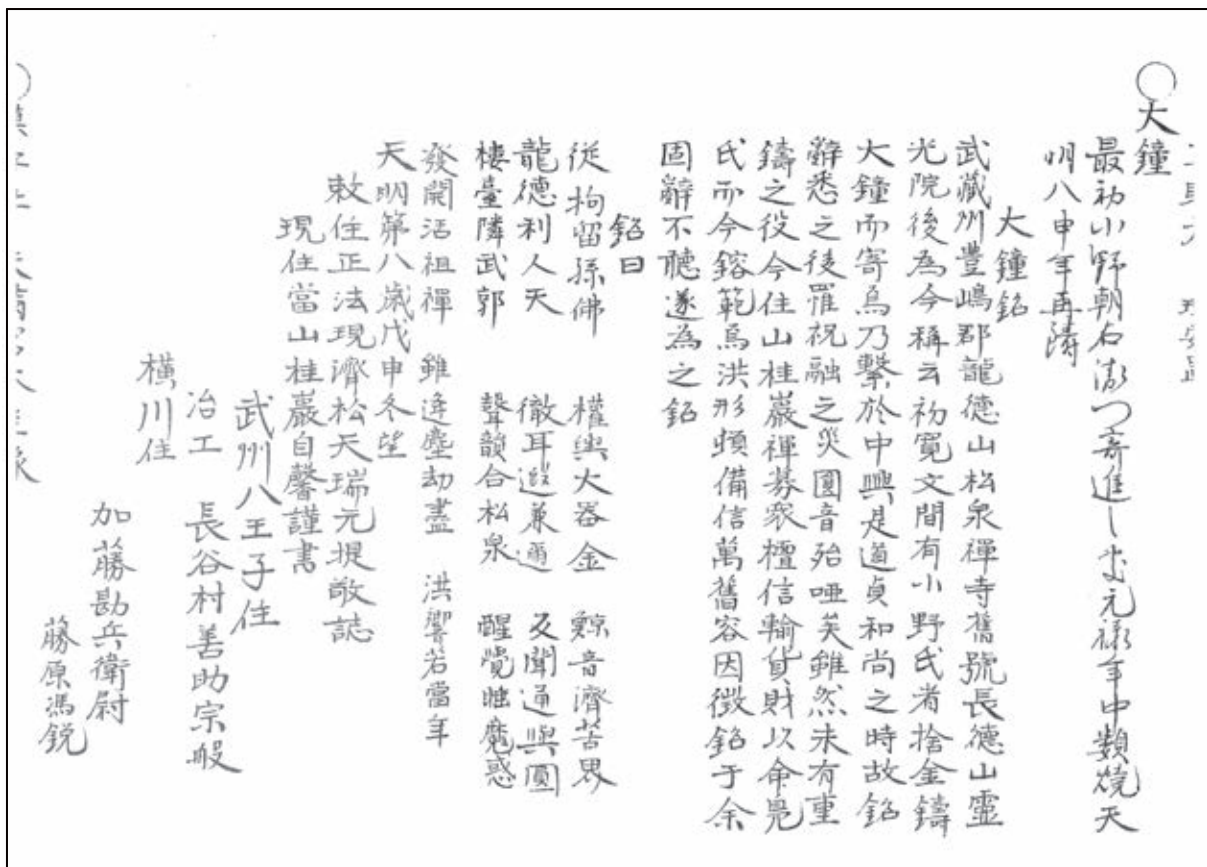
今後の調査が楽しみなところです。



写真①：法藏寺半鐘銘



写真②：天現寺梵鐘銘



写真③：松泉寺梵鐘銘

写真①～③：『御府内寺社備考』（名著出版、昭和 61 年発行）より転載

## 八王子の一里塚 中村 明美

江戸に幕府を開いた徳川家康は慶長6年(1601)日本橋を起点として公用の通行や物資の輸送に備え東海道に伝馬制<sup>てんませい</sup>を定めました。そして五街道(東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中)の整備を順次行ないました。慶長9年(1604)徳川家康が秀忠に命じ、東海・東山・北陸の三道に里程の目安や休憩場所として、街道沿いに一里ごとに一里塚(一里は約4km)を築かせました。その後主要な街道に榎や松を植えた一里塚が造られました。現在では道路の拡幅や宅地化などにより残っているものは少なくなっています。

八王子を通る甲州道中は江戸から下諏訪まで道程53里(208.5km)で、市内に4箇所の一里塚が築かれました。日野宿から多摩川を渡り西に進むと横山(八王子)宿の東側の入り口に江戸から12里にあたる新町の一里塚がありました。『甲州道中分間延絵図』<sup>ぶんげんのべえず</sup>(文化3年完成の街道図)には「稻荷」として描かれており一里塚の記載はありませんが、以前は塚の上に稻荷祠を祀っていました。一里塚の榎があった場所を市指定文化財(史跡)としており、現在は新町の竹の鼻児童公園内に石碑(写真)が建てられています。

残り3つの一里塚については、『甲州道中分間延絵図』に場所が描かれています。2つ目は散田村に入り長安寺(現・並木町)を通過し、地藏堂と閻魔堂が並ぶ手前に散田村新地の一里塚が道の両側に2つ向かい合っており、現在の横山事務所のあたりになると思われます。3つ目は駒木野の関所を越え、念珠坂を下った荒井(現・裏高尾町)のもので、昭和59年に区画整理が行なわれるまでは小仏川と街道の間の竹やぶの脇に小さな塚があったそうですが、現在は住宅となっています。最後の一つは保蔦土橋の一里塚で、宝珠寺を越えて小仏峠に登る手前、小仏川とヤゴ沢(北側から小仏川に合流する沢)の合流付近(裏高尾町小仏)がこの場所と思われ、これが市内最後の一里塚となり小仏峠を越え小原宿(神奈川県相模原市)へと続きます。

その他の街道では、幕末から明治時代中ごろまで八王子から横浜へ生糸を運搬するのに利用した、浜街道の一里塚跡が礎水に残っています(八王子市郷土資料館だよりNo.81「八王子の古木」)。八王子の宿場から(八日町交差点が起点)一里にあたり、現在の榎は二代目と伝えられ絹の道資料館から南に100mほど行った場所となります。

また江戸時代の地誌書である『武蔵名勝図会』と『新編武蔵国風土記稿』によると、片倉村と子安村の境界近くに鉦打塚<sup>かねうち</sup>(現・子安町二丁目あたり)という一里塚があり、塚は高さ1丈(約3m)ほどで以前は榎の大木があり、そこから横山宿を通過し川越に向かう道沿いの石川村の尾崎(現・尾崎町)と、多摩川を渡った宮澤村(現・昭島市宮沢町)にも一里塚があったとの記述があります。

案下道<sup>あんげ</sup>(現・陣馬街道)の一里塚については、案下道の旧道沿い(恩方市民センター南側の道路沿い、現・西寺方町)に一里塚の榎があったと伝えられています。

街道を通して、八王子に様々な文化やものが伝わりました。明治時代には鉄道が開通し交通手段は大きく変化しましたが、歩いて旅した時代に思いをはせながら、街道を歩くのも歴史の楽しみの一つではないでしょうか。



写真 新町竹の鼻の一里塚跡の碑

[主な参考文献] 『甲州道中分間延絵図』第二巻・第三巻 昭和59年 東京美術発行、『八王子市文化財調査研究報告書』平成5年 八王子市教育委員会、『甲州道中』平成10年東京都教育庁生涯学習部文化課、『小仏街道展』昭和53年浅川地区社会教育推進委員会 ほか